

特別寄稿

実践活動 / 症例報告のこれまでの総括と今後の展望

木村 典代^{*1, *2}

^{*1} 日本スポーツ栄養学会会長、^{*2} 高崎健康福祉大学

I スポーツ栄養における実践活動/症例報告の意義

本学会は、スポーツ栄養学における研究の促進と情報提供、専門家の教育・養成、そして選手の競技力向上、国民の健康保持増進を寄与することを目的とし、2007年にNPO法人化した。2013年には研究会から学会へと発展し、今日に至っている。NPO法人化の前年度は会員数500名にも達していない小規模な研究会だったが、2022年には2,000人を超し、15年間で4倍にも会員数を増やすことができた。

本学会がこのような急成長を遂げたその背景には、日本スポーツ協会と日本栄養士会の共同認定資格である公認スポーツ栄養士養成が2008年にはじまり、スポーツ栄養への関心が一気に高まったことがあげられる。本学会の初期の理事の先生方や関係組織の皆様の尽力の賜である。

その一方で、スポーツ栄養学における研究の促進と情報提供が、学会としての課題であった。本学会の特徴の一つとして、スポーツ栄養学の基礎研究を担う研究者とスポーツ栄養の現場で実践活動を精力的に実施する栄養士が共存していることがあげられる。研究者は新たな手法・指導法を提案し、現場の栄養士はそれを現場の実情に合う手法へと改良・実施する。そこから新たな問題や研究テーマが見出される。このサイクルを円滑に回していくことこそがスポーツ栄養学の発展のために必要不可欠である。つまり、現場の栄養士の一人一人がスポーツ栄養学の基盤を高めていくための第一人者であるという意識を持って、実践活動/症例報告を行うことが重要なのである。

II NPO13期～16期の学術事業強化活動

NPO13期からは、このスポーツ栄養学の基盤を高めていくために、学術事業の強化に向けた組織づくりと、学術事業の活性化を精力的に行ってきた。そして、学会員の皆様にもそこへ積極的に参加していただくための仕掛けを行ってきた。

具体的な活動として、研究・教育支援事業運営委員会が中心となって実施した各種講習会における実践活動/症例報告促進に向けたセミナー、研修、ワークショップ、会員の広場（執筆活動に向けた交流会）、スポーツ栄養士と研究者のマッチング企画などがあげられる。また、研究誌編集委員会では、特別寄稿や総説記事の掲載、実践活動/症例報告の投稿規程の整備や実践活動/症例報告のショートレポートのための投稿規程の策定、ショートレポートで構成されるサプリメント号の発行などを行ってきた（表1）。その他、学会大会時には、学会本部企画として実践活動報告促進のための鼎談や座談会を実施するとともに、一般演題発表の実践活動/症例報告のセッション後にフロアでフリーディスカッションを開催するなど、会員の皆様が発表しやすくするための工夫を凝らしていただいた。

III 学術事業の強化による4年間の成果

図1と図2には、学術事業を強化したことにより、どのような成果が得られたのかを、学会大会の演題発表数の推移と、日本スポーツ栄養研究誌に掲載された論文数で表した。

1. 学会大会の演題発表数の推移

NPO13期の活動は2019年9月に開始されたが、その数か月後には、世界規模でCOVID-19が蔓延し、多くの学会活動はオンライン化を余儀なくされた。本学会においても2020年に予定していた仙台開催予定の第7回学会大会は開催を見送ることになり、翌年2021年にオンラインにて開催した。そのため、総演題数は第6回大会の7割程度となってしまったが、実践活動/症例報告（スポーツ栄養マネジメント報告を含む）の演題数は、例年の数をほぼ維持できていた。翌2022年には集合形式による第8回大会を相模女子大学にて開催したが、この傾向は同様であり、少しずつではあるが実践活動/症例報告の発表数が増加している。

表1 NPO13期～16期の実践活動/症例報告増に向けた学会事業一覧

2020年1月	日本スポーツ栄養研究誌 13号 依頼総説「実践現場における研究方法の考え方と実施方法の基礎の基本のABC」
2020年11月	公認スポーツ栄養士更新研修 「スポーツ栄養現場における実践活動を形にする」(聴講者:262名)
2021年1月	日本スポーツ栄養研究誌 14号 特別寄稿「スポーツ栄養現場における実践活動を形にする」
2021年1月	サポートお悩み持ち寄り広場の開催(参加者:11名)
2021年7月	日本スポーツ栄養学会第7回大会 鼎談「実践活動報告について考える」
2021年11月	公認スポーツ栄養士更新研修 「現場での活動をまとめてみよう:症例報告編」(聴講者:206名) 「現場での活動をまとめてみよう:実践活動報告編」(聴講者:203名)
2021年12月	スポーツ栄養学研究セミナー 「現場での活動をまとめてみよう:症例報告編」(聴講者:94名) 「現場での活動をまとめてみよう:実践活動報告編」(聴講者:78名)
2022年1月	オンラインによる「会員の広場」の開催(参加者:10名)
2022年3月	第1回「実践活動/症例報告ショートレポート執筆支援ワークショップ」(参加者:4名)
2022年8月	日本スポーツ栄養学会第8回大会(学会企画) 「実践活動/症例報告を書いてみよう!-第1回執筆支援ワークショップ座談会-」(聴講者:62名)
2022年8月	日本スポーツ栄養研究誌第15号サプリメント号発刊
2022年9月	第2回「実践活動/症例報告ショートレポート執筆支援ワークショップ」(参加者:5名)
2022年11月	公認スポーツ栄養士更新研修 「実践活動/症例報告レポートの執筆から完成まで」(聴講者:203名) 「研究誌掲載原稿の執筆過程から学ぶ、症例報告レポート執筆のポイント」(聴講者:203名)
2022年11月	オンラインによる「会員の広場」の開催(参加者:12名)
2022年12月	スポーツ栄養学研究セミナー 「実践活動/症例報告レポートの執筆から完成まで」(聴講者:22名) 「研究誌掲載原稿の執筆過程から学ぶ、症例報告レポート執筆のポイント」(聴講者:22名)
2023年1月～3月	実践活動報告/症例報告の活性化に向けたスポーツ栄養士と研究者のマッチング企画 (研究者対象説明会:20名、スポーツ栄養士対象説明会:61名) 合同マッチング企画(研究者13名、スポーツ栄養士15名)
2023年8月	日本スポーツ栄養研究誌第16号サプリメント号発刊
2023年9月	日本スポーツ栄養学会第9回大会(学会企画) 「実践活動報告/症例報告を書いてみよう!-マッチング企画座談会-」

2. 日本スポーツ栄養研究誌の原稿区分別掲載数

図2には、日本スポーツ栄養研究誌に掲載された論文数を特別寄稿+総説、原著論文+短報、資料、実践活動/症例報告+スポーツ栄養マネジメントの4つに区分して表したものである。日本スポーツ栄養研究誌へ掲載された論文数は、4年単位で少しずつ増加していることがわかる。特に、実践活動/症例報告の増加に向けて学術事業を強化したNPO13期以降はこの分野の論文数が増加した。15号と16号での顕著な増加はサプリメント号の発刊によるものである。

学会大会における演題発表数および日本スポーツ栄養研究誌の掲載論文の傾向からみても、実践活動/症例報告を行おうとする学会員が増え、学会として一定の事業成果が得られたものと考えている。

IV 学術事業の強化における課題と今後の展望

1. 学術事業強化における課題

この4年間、学術事業を推進する上でブレーキになっていると思われたことは2点あった。1つめは実践活動報告と一般的な調査・研究論文の違いを浸透させるのに時間を要したことである。実践活動報告は、スポーツ栄養の現場で活動する者が、日常的に行っている業務や栄養指導・サポート活動の中で新たに実施した試み、改善および工夫などで報告するに値すると判断されたものであり、症例報告は、単一あるいは少数の選手・チーム等が実施している栄養学的手法の経過・成果、もしくはその選手やチームの現状を丁寧に報告したものである。一方、原著・短報は、研究や調査に関する論文で科学的価値のある事実を含むものとしている。実践活動報告や症例報告が、原著・短報

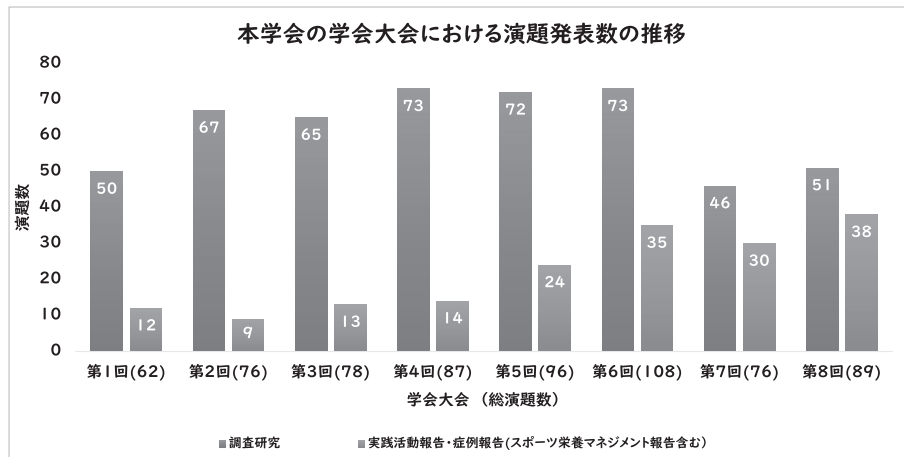


図1 本学会の学会大会における演題発表数の推移

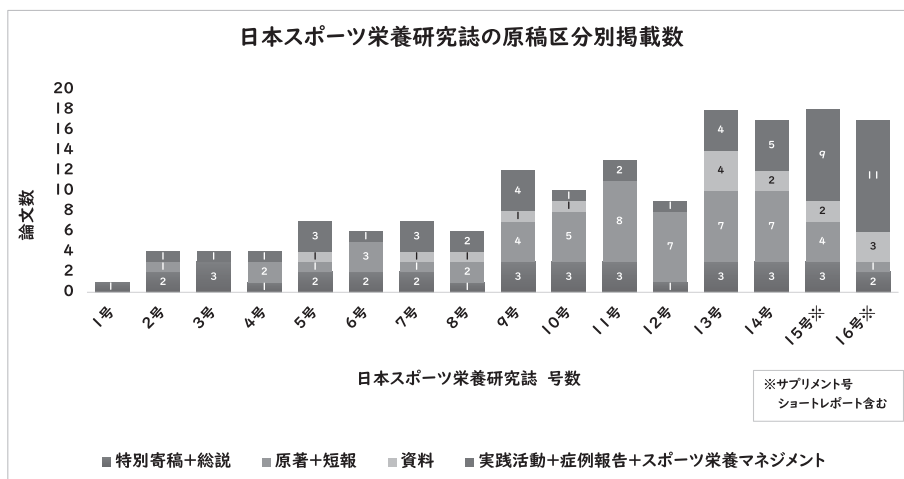


図2 日本スポーツ栄養研究誌の原稿区分別掲載数 (※はサブリメント号も含む)

の下位にあるものだと捉えている方が未だに多いように思われるが、上下レベルの問題ではなく、全く異なる区分として位置づけられていることにご留意いただきたい。

2つめは、これまで学会発表や論文執筆経験のない方達に、実践活動/症例報告をしてもらうことの難しさである。これは、単に大学学部時代に卒業論文を書いたことがないとか、論文発表をした経験がないことだけが要因となっているわけではないと感じている。少なくとも、日常業務の中でPDCAを回している方であれば、学会発表へのハードルはそれほど高くないはずである。すなわち、日常の業務の中でうまく行かないことがあったら、その要因をアセスメントし、その課題解決のために6W2Hに基づく計画をたて、明確な評価指標を掲げて到達目標を設定し、業務を実行し、それがどうだったのかを評価し、改善方法を見い

出して次の計画に反映させているかである。論文が書けない、もしくは発表ができないと思っている方は、よいデータがあるかないかではなく、日常業務の中でPDCAを回しているかどうかをそれぞれの立場で見直していただきたい。

2. 今後の展望

日本スポーツ栄養学会では、現在、年間で2回、日本スポーツ栄養研究誌を発行している。特に夏に発行しているサブリメント号は、実践活動/症例報告のショートレポートで構成されている。2023年から開始したマッチング企画は、ショートレポート執筆の大きなきっかけになっている。マッチング企画とは、論文執筆経験はあるもののスポーツ現場を持たない研究者と、スポーツ現場を持っているが論文の執筆経験のない栄養士がコラボすることで、埋もれてしまいがちな実践活動や症例を論文化しようという試みである。第

16号のサブリメントではマッチングで生まれた論文が2報掲載されている。学会員の皆様には、ぜひ、これらの論文に目を通していただきたい。そして、少しでも論文執筆にトライしてみたいと思った方は、日本スポーツ栄養研究誌に限らず、様々な雑誌に掲載されている論文に目を通していただきたい。よい文章を書けるようになるかどうかは、どれだけ多くの論文を読んだかに比例する。

また、本学会に所属している研究者の皆様には、マッチング企画への参加はもちろんだが、原著・短報の投稿もお願いしたい。実践活動/症例報告の数は徐々に増えているが、その一方で原著・短報数が減少した。研究論文や調査研究を形にするためには、時間と労力を費やすが、スポーツ栄養学の基盤を高めるために

は、原著・短報による科学的エビデンスの蓄積も必要不可欠である。本学会が、今後、日本学術会議の「日本学術会議協力学術研究団体」を目指す上でも、学会としてスポーツ栄養学に関する情報を数多く発信をしていくことが重要となる。

最後に、日本スポーツ栄養研究誌へ実践活動/症例報告の執筆に挑戦された学会員の皆様、学会大会にて発表を試みた学会員の皆様に対して心からの賞賛と敬意を表します。また、この4年間、学術事業強化のメンバーとなった理事の皆様、論文査読にあたられた皆様、本事業に関わられた全ての皆様に心から感謝の意を表します。